



■大使からの活動報告 2016年1月号

<新大統領就任式典と日本特集>

平成 28 年 1 月 19 日

在グアテマラ日本大使館

特命全権大使 川原 英一

◆大統領就任式典行事・就任演説

グアテマラの新年早々、1月14日に新大統領就任式典がありました。昨年の大統領選挙で汚職対策を公約に掲げて当選したジミー・モラレス新大統領は、大統領選挙キャンペーン中、フェイスブックやツイッターなどを使い、他大統領候補の選挙キャンペーン費用の数十分の一というきわめて少ない選挙資金で戦い抜き、昨年10月25日の大統領選2回目投票で圧倒的な大差をもって勝利しました。従来から、グアテマラ政府の予算基盤は、他の中米各国のそれに比べて弱体で、栄養改善、公的医療サービスや教育レベルの

向上等の長年の課題に取り組むには少ない予算事情が続いています。因みに今年1月から始まる政府予算は、昨年11月末に国会で承認をされましたが、前年予算額とほぼ同じです。モラレス新政権が、医療・教育などの公共サービスの向上を目指すには、大変に厳しい門出となったものと思います。

※(写真:左側最上段)14日午後5時から国立劇場大ホールでの大統領就任式典での大統領宣誓式、大統領就任演説(左上写真)、※同会場内2、3階の招待客席の一部風景(左上から3段目写真)、※同式典終了前のモラレス大統領夫妻、カブレラ副大統領とバイデン米副大統領との挨拶風景(左上から3段目右写真)

※14日午後10時半頃国家文化宮殿で行われたモラレス新大統領への謁見直後、同会場内でエストラーダ外務次官と(左上から4段目右側写真)及び宮殿控え室入口前(左上から4段目左写真) ※宮殿内一階中庭で同14日午後11時過ぎから開始したレセプション会場でのモラレス大統領(左側下から2番目写真)およびファーストレディと当方夫妻(左側の写真)。

さて、1月14日午後、当国国立劇場で、グアテマラ新大統領就任式典が行われました。バイデン米副大統領、フアン・カルロス・スペイン前国王、中米各国の大統領・副大統領、中南米地域機関(CELAC)代表としてのコレア・エクアドル大統領などを含む各国代表、当国グアテマラの国会議員・最高裁長官等、内外から



出席した多数招待客を前にして式典が進められ、新大統領宣誓式、大統領就任演説など2時間近くにわたりありました。

モラレス新大統領は、これまでの大統領とは異なるスタイルと口調で、国民が団結して、この難局を共に乗り越えて行こうとの趣旨を誰にもわかりやすい言葉で、大統領として不転退の決意を語り、この国の未来を変えていくとの前向きで力強いメッセージを発信しました。国民の最大関心事である汚職対策には果敢に取り組むこと、この国の経済成長率を昨年の4%からさらに高い成長率をめざす、そのため投資を積極的に呼び込めるよう、皆が、これからよく働く必要があることなど、新大統領は、式典会場に出席しているグアテマラ人のみならず TV 中継をみている全国民に直接に語りかけて、式典を見た多くの国民を感動させ、新大統領誕生を喜ぶ1日となりました。

翌朝1月15日付当地主要紙は、就任式典でのモラレス新大統領の様子を、一面トップで大きく取り上げて、好意的な内容の報道となっていました。

<※本頁左側の写真:いずれも当地主要紙の大統領就任式を伝える報道記事>

◎ジミー・モラレス大統領の横顔:

公式サイトによれば、1969年3月18日生まれで、3才の時に父親が交通事故で亡くなり、その後、祖父母の元で母、兄弟が暮らし、祖父がイサバルのパナナを首都で販売する仲買人の商売をしていたことから、10才頃から祖父の商売の手伝いをしていた。母親も子供達に商売をさせることに積極的でした。サン・カルロス国立大学経済学部卒、その後、パンアメリカン大学マスメディア修士及びマリアノ・ガルベス大で安全保障・防衛修士を取得。さらに、サン・カルロス大の戦略的安全保障に関する博士課程を修了した。その後、サン・カルロス大学で経済やコミュニケーション学の教員を務めた。

また、モラレス大統領は、23才頃から経営者になりたいと希望して起業活動を始め、小規模事業主のための金融支援オフィス、プラスチック製品販売などいくつもビジネス経営を行い、特に中米の映画ビジネスのパイオニアとなり、映画製作者・同監督をして、国際映画祭で賞を獲得。最近までコメディアンとしても活躍した。福音派(Evangelical)教会信者。子供4人。

外部評価によれば、コメディアンとして、ユーモアで場の雰囲気や和ませるのが得意であり、他方、人

物について綿密な分析をして決定を下すという面もある。

■日本特集：中米記者招聘で訪日したエル・ペリオディコ紙記者

昨年、日本と中米各国との友好年(2015)に当たります。昨年12月中旬、当地主要紙であるエル・ペリオディコ紙のベテラン記者が、中米各国の主要紙記者と共に日本を訪問して、各地取材してくれました。訪日後、エル・ペリオディコ紙による



日本特集記事第一号が、1月17日付同紙の17面と18面の両面記事として掲載されました。同紙の記者としては初めての訪日であり、東京、京都、広島などを巡り、記者の目を見た各地(金閣寺、浅草寺、宮島、日本酒蒸留所など)での印象記などを報じています。今後、日本企業関係者へのインタビュー、日本が世界に誇る先端技術とその実用化の現状などについて日本特集記事を、続々、掲載予定であると聞いており、大いに注目を致しております。

※同日本特集記事詳細については、当大使館HPの日本関連特集記事サイトに掲載されますので、併せてご覧ください。(了)